

国際交流学習のための研修プログラムの開発 —教師向けワークショップ型コースを通して—

Development and evaluation of lesson program of international exchange learning
—The type of workshop exercise for teachers—

清水 和久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

国際交流学習を初めて行う教師にとっては、相手の見つけ方や交流の進め方などをわからないことが多い。実際に体験してみないとその良さも見えてこない。そこで、国際交流が未経験の教師に対しても、今後取り組んでみたいと思う気持ちにさせる研修が必要であると考え、国際交流学習を行うにあたっての理論学習と、成果共有型の国際共同壁画作成プロジェクトである「アートマイルプロジェクト」の模擬体験を含んだ研修プログラムを開発した。このプログラムを初任者研修の国際理解講座として実施し、終了後、アンケートを実施した。結果、アートマイルプロジェクトに対する周知と、国際交流学習参加への意欲を引き出すことに効果的であることがわかった。

〈キーワード〉

国際交流学習、模擬体験、ワークショップ

1 はじめに

筆者は、国際交流学習を教育現場で普及させるために2006年度よりJapan Artmileと共同でカリキュラムを開発し「アートマイルプロジェクト」として実践を行ってきた。このプロジェクトには毎年50校余りの参加があり、石川県からの参加数は10校にのぼる。

しかし、このような国際交流学習プロジェクトは、小学校では高学年の「総合的な学習の時間」として取り組まれていることが多くなる。そのため1度このプロジェクトを経験しても、次年度の担当学年によっては続けてできない場合が多い。逆に言うと毎年、高学年になった新しい教員が初めて実践するケースが多くなるということを意味する。

そのため、どのように進めたらいいのかイメージがかわず、決められたスケジュールに追われるだけの実践になる可能性もある。そこで、1年間の実践のイメージが持てるように、模擬体験も含んだワークショップ形式の教員研修プログラムを開発することとした。

また、総合的な学習の時間で国際交流学習を扱う場合には、最初の導入学習が重要であるため、児童に問題意識を持ってもらうための体験ワークショップも研修プログラムで体験できるように考えた。

2 研究の目的

国際交流学習の年間プログラムを理解するための教員研修プログラムを開発し、効果的な内容を明らかにする。また同時に、国際交流学習の導入授業のためのプログラムを作成し、児童に世界に対する関心を持ってもらうと共に、国際交流への期待度を高める内容を吟味する。

3 研究の方法

3-1 教員向け国際交流学習研修プログラムの作成

1) 国際交流学習研修プログラムの開発

今年度のアートマイルプロジェクト参加教員を対象として関西地区および関東地区で半日の研修プログラムを実施、そこでの手応えを元に研修プログラムを開発する。

2) 国際交流学習研修プログラムの実施と評価

国際理解教育に関心のある初任教員（小、中、高、特別支援）を対象に研修プログラムを実施、アンケートによる評価を行う。

4 研究の結果

4-1 教員向け国際交流学習研修プログラムの作成

7月21日（土）に関東地区（横浜）、7月28日（土）に関西地区（神戸）の今年度のアートマイルプロジェクト参加教師を対象に研修会を実施。その研修結果を参考に国際

理解初任者研修用テキストを開発。以下研修プログラムのテキストの項目を提示する。

4-1-1 国際交流学习研修プログラムの項目

第1章 国際教育推進の意義

- 1-1 日本を取り巻く現状
- 1-2 グローバル社会に対応する国際理解教育の推進
- 1-3 キーコンピテンシー（国際標準の学力）
- 1-4 教育現場における対応
- 1-5 総合的な学習の時間と国際教育の関係

第2章 国際交流プロジェクトの事例紹介

- 2-1 国際交流学习の分類
- 2-2 アートマイルプロジェクト
 - ・年間スケジュール
 - ・ESDとの関係特徴
 - ・小学校事例紹介
- 2-3 テディベアプロジェクト

第3章 国際交流における評価の方法

- 3-1 評価の種類 機能と尺度
- 3-2 国際交流学习でつきたい力
- 3-3 学習者の主観的な評価方法

第4章 国際TV会議の解説と体験

- 4-1 TV会議のねらい
- 4-2 TV会議のコツ

第5章 ワークショップ

- 5-1 ワークショップのねらい
- 5-2 ワークショップの実施
 - 「もし世界が100人の村だったら」

第6章 アートマイルの絵の模倣作成体験

- 6-1 交流国及び交流校の想定
- 6-2 絵のテーマの決定
- 6-3 各自の案の決定
- 6-4 グループでの下書き作成

第7章 国際交流カリキュラム作成演習

- 7-1 ねらいと展開例
- 7-2 サンプルスケジュールの紹介
- 7-3 交流国を想定したカリキュラムの作成

以下各章のねらいと主な内容の詳細について記述する。

4-1-2 第1章 国際教育推進の意義について

第1章において、2006年から文部科学省の方針が他の国や異文化を理解する教育や単に体験したり交流活動を行ったりすることにとどまっていた「国際理解教育」から、国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎育成する為の教育である「国際教育」に代わったことを説明する。ここで

は、外国のことを調べ理解するだけではなく、主体的な行動につながる態度や能力を育成する必要から、何らかの情報発信につながるか行動が重要であると考えられる。

また、国が異なっても共通に必要とされる国際標準の学力としての「キーコンピテンシー」（①道具を相互作用的に使用できる力、②異質な人々に相互に関わり合う能力、③自律的に行動する能力）を取り上げ、この能力をアートマイルの国際交流プログラムで獲得することが可能であることを説明する。以下具体的に3点について述べる。具体的には、①の道具を相互作用的に使用できる力は、国際交流を通して、地域の情報を調べたり、まとめたりしてデジタル化し、発信する能力であり、②の異質な人々との関わりはまさに国際交流で達成可能なものであり、③の自律的に行動する力は、交流のゴールが明確であるため、見通しを持って行動し、そのプロセスの中で自分たちの思いが取り入れられて主体的に取り組めることを意味する。このように、3つの力を国際交流プロジェクトにおいて獲得することをねらいとする。

4-1-3 第2章 アートマイルプロジェクトの位置づけ

国際交流学习の分類に基づいて提示し、特徴づける。

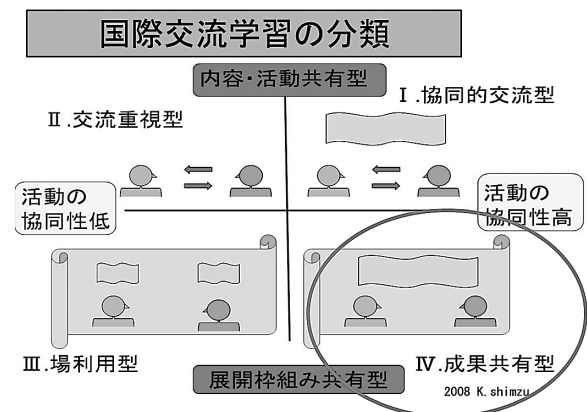


図1 国際交流学习の分類

清水（2008）は、国際交流学习を活動の協働性の高低と共有する内容によって4つの事象に分類している。国際教育の視点からすると、活動の協働性が高く、内容および活動自体を共有する方がベストではあるが、教育現場において、日々交流相手の教員と英語で連絡を取り合って交流活動を行う事は非常に難しい。よってある程度スケジュールが決まってい、交流校と共同で作品を作る成果共有型が、国際交流の型としては、取り組みやすいと考える。この成果共有型国際交流として実施できるのがアートマイルプロジェクトである。

このプロジェクトは2校間で1枚の大きな壁画を作成することがゴールとなっており、作業の協働性が極めて高い。またある程度作成の枠組みが決まっており、それぞれの学

校の学習進度にあわせて、教師同士の頻繁な打ち合わせがなくても進めることができる。

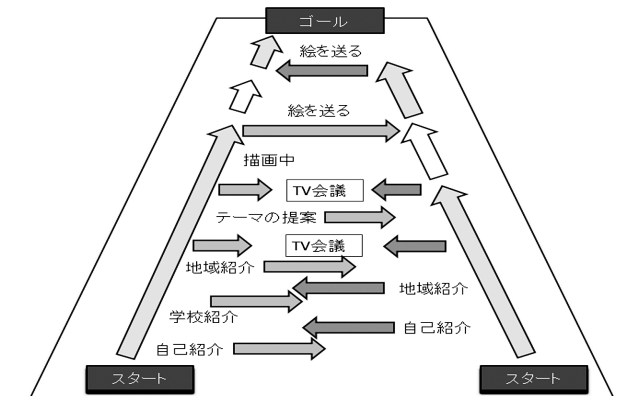


図2 作成枠組みと展開事例

その他、下記のような特徴がある。

- ・ 文部科学省が進めているESDの「持続可能な社会づくりのための担い手づくり」として最適な学習プログラムとして推奨されている。
- ・ 外務省が進めている国際教育・開発教育として有効。
- ・ 全体の流れの中で教師が自らの学習のねらいに合わせて自由に授業設計ができ、総合的な学習の探究学習として活用できる。
- ・ 小学校の学習指導要領の外国語活動に示された「外国語を用いてのコミュニケーションを図る」「異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深める」学習として活用できる。
- ・ 目的がはっきりしているので交流活動や英語活動などの学習に必然性があり、児童生徒の学習意欲が高まり持続するゴールは2か国で壁画を作成することではあるが、そこに至るプロセスには自由度があり、それぞれの学校の学習の進度に合わせて柔軟に対応できる。

これらを説明したのち、具体的な実践事例として小学校でこれまで行ってきたアートマイルプロジェクトの実践事例を提示する。(2011年度の事例15事例中2事例)

なお、その他の国際交流プロジェクト例として「テディベアプロジェクト」にも言及する。このプロジェクトは互いにぬいぐるみを送り合い、外国からきたそのぬいぐるみの身になって異文化として体験して日記を書いたり、デジカメで写真を撮りあったりすることで日常的な文化を相手国に紹介するプロジェクトである。この場合は相手との活動の協働性は低く、ぬいぐるみの交換という場を利用して、自国の文化を紹介することから清水(2008)の分類でいえば「場利用型」に当てはまる。この活動はシンプルではあるが、ぬいぐるみを送りあってしまえば、後は各校の活動に任されるので、国際交流としては人気が高く比較的取り組みやすい国際交流プロジェクトである。どちらかという

と初心者向きである。

4-1-4 第3章 国際交流学習における評価

第3章では国際交流学習における評価の考え方を扱う。

国際交流学習などでいつも問題になるのは、評価の方法である。総合的な学習の時間で行われることの多い国際交流学習は、活動期間が長く、意識して記録をとらないと記録が残らない場合が多い。最後の作品は共同作品となるため、作品だけで個々を評価する事は難しい。

アートマイルは絵を描くこと自体が目的ではなく、そこに至るまでのプロセスを重視する。外国の友達と「絵を完成させた」という達成感だけで終わってしまうと、学習者自身も自分についた力を可視化することできない。教師があらかじめ評価の観点を学習者と共に共有しておくことで、学習者も主体的に活動でき、自分自身の力を客観的にメタ認知できるようになる。

<機能面から見た評価の分類>

評価を機能で分けると、診断的評価、形成的評価、総括的評価に分類される。

診断的評価：交流を行う前に相手国についての印象や知識をイメージマップなどに記述しておく活動後の違いを比較することができる。

形成的評価：学習指導の途中において実施し、それまでの指導内容を学習者がどの程度理解したかを評価する。教師はこの情報を元に指導の計画を変更し、補充的な指導も行う。交流中におこるエピソードも含めて様々な壁を乗り越える中で自分の成長を感じられる評価をおこなう。また、具体的な評価のポイントを決めて共有化しておく。

総括的評価：学習指導の終了後に行い、学習者が最終的にどの程度の学力を身に付けたかを評価する。成績をつけるのに使用するほか、教師が自らの指導を省みる材料としても用いることができる。学習者自身が活動全体を振り返って自分の成長を実感できる評価、作品を鑑賞することで自分達の思いが伝わったか、相手の思いを分析するなどの点での振り返りをおこなう。

<国際交流学習でつきたい力>

アートマイルプロジェクトを通して、9つの力を育むことができる。

表1 アートマイルでつく9つの力

1. コミュニケーションスキル
2. 人間関係を作る力(交流相手・学級内)
3. 情報活用能力(収集・発信)
4. 表現力
5. 作品を鑑賞する力
6. 協働作業をする力(役割・段取り)
7. 自文化の理解、自分を見つめる力
8. 異文化の理解力
9. 学習を追究する意欲

1～6は思考・判断・表現力に関して、7,8は知識理解、9は興味関心に関する部分である。これらの9つの力について、活動の中で教師が評価する場面を決めておき、学習者とも共有する事によって、学習者自身に自己の成長を認識してもらおうとするものである。総合的な学習の時間においては、能力を他の人と比べるのではなく、個人内評価によって個人の進捗を可視化する評価が重要視されるべきである。その意味で学習や自身が評価できることが望ましい。

4-1-4 第4章 TV会議の解説と体験

国際交流の中で特に交流相手の存在を実感できるのがTV会議である。交流相手とのリアルタイムのやりとりは、活動の一体感を高め、モチベーションを最後まで維持することに役立つ。研修会では録画した子ども達が行ったTV会議の様子を動画で見せるとともに、できればリアルタイムで外国とつなぎTV会議を実演してみせることが望ましい。

4-1-5 第5章 ワークショップ

総合的な学習の時間では、最初に共通体験をおこない、その共通体験から課題を見つけることが多い。国際交流をはじめの場合も、共通体験が必要である。そこでワークショップ版「世界がもし100人村だったら」*1を活用することにした。この活動は、参加者1人1人が100人村の1住人の役割を演じ、実際に身体を使いながら世界の格差や多様性を体感することができるものである。参加者が100人に近いほど寄り実感できる活動となる。

教員向けの研修会での実施となるが、体験した教員が是非子ども達にさせたいと思うほど、世界の格差が実感でき活動である。なお、研修の人数が少ない場合は、スライドでの説明のみとなる。

4-1-6 第6章 アートマイルの模擬構想体験

国際交流の理論的な話と導入体験のあとで、アートマイルの交流を模擬体験する。具体的には6人1グループとなり、そのうちの半分は日本人役、もう半分は交流国の人の役になり、話しあいながら絵の構図を決めて作業を行う。

この場合、交流相手国の文化や観光地の情報などを印刷しておくことで作成のイメージがわかりやすい。グループ内で描きたいテーマを決め、各自で考えた後、国ごとに絵のアイデアをまとめ、日本と交流相手国とで話しあって決めていく過程を体験する。

4-1-7 第7章 カリキュラム案の作成

研修参加者に自分の学校で国際交流を行う場合のテーマや相手校を仮に考えてもらい、自分で半年間の交流カリキュラムを作成してもらう。

4-2 教員向け国際交流学習研修プログラムの評価

小学校教員17名、中学校教員13名、高校教員12名、特別支援教員2名、合計44名の初任教員を対象として実施。

上記の7章分のプログラムについて6件法（6とてもよくわかった、5よくわかった、4どちらかというところとわかった、3どちらかというところよくわからない、2よくわからない、1まったくわからない）で評価をとった。

表2 研修プログラムに対する評価

	1章	2章	3章	4章	5章	6章	7章
6	20	32	10	27	34	23	8
5	18	12	17	14	8	16	12
4	6	0	13	2	1	3	18
3	0	0	4	1	1	1	4
2	0	0	0	0	0	0	1
1	0	0	0	0	0	0	0

アンケートの評価が高かったのは2章「事例の紹介」、4章「TV会議の体験」、5章「実際に身体を動かしたワークショップ」の所であった。事例においては、英語を実用的に使っている場面や、生き生きと作品制作に取り組んでいる児童の活動の様子に関心が高かった。またアートマイルに参加している台湾の先生にTV会議に出てもらい、先生方と直接話してもらったことで「リアルタイム」の交流の良さを体験できたようである。最後の100人村のワークショップでは、「クラスの子供達に是非体験させてほしい」という意見が多かった。これらのことから、具体的にイメージがわき、体験できる活動を取り入れることが必要であるとわかった。

逆に低かったのは、3章「評価の方法の説明」と7章「カリキュラム作成演習」の所であった。評価に関しては一番難しいところでもあり、さらに具体的な事例に即した評価方法の説明が必要とされる。またカリキュラムの作成は時間の保障が充分なかったためと、半年にわたるカリキュラムを構想することはタスクとして重すぎたと考えられる。

5 研究の考察

今回国際交流学習研修プログラムを作成し実施することができた。児童への評価の部分はさらに検討が必要であるが、参加者44名中、38名から国際交流学習に対して取り組んでみたいとの回答を得られた。今後研修プログラムのテキストを冊子の形でまとめて活用して行きたい。

参考文献

- *1 http://www.dear.or.jp/book/book01_100.html